

Survey of Materials for Naniwa odori (浪花踊) :
Satos' Naniwa odori Banzuke (番付) from the
Sixteen Performance to the Twenty-third
Performance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43396

浪花踊に関する史料調査 — 佐藤家伝来の浪花踊番付（第十六回～第廿三回） —

人間社会環境研究科 客員研究員

笠井 津加佐
佐藤 恵

要旨

本稿は佐藤家所蔵浪花踊番付のうち、第十六回から第廿三回（戦前最終回）までの史料紹介である。また、文末に掲げた回毎の作者、作曲者、振り付け者、美術担当者などの一覧表を基に、浪花踊の特徴について簡単な纏めを試みた。

即ち、浪花踊の変化は、花柳舞踊研究会との関係が大きく影響しており、田中良の著作により、岡村柿紅、花柳壽輔、田中良らの浪花踊への関与の経緯や目的において、その変化を一部、裏付けることができた。音楽に関する部分は、まだ、記録が少なく、更なる精査を必要とする。

キーワード

浪花踊（北ノ新地）、花柳舞踊研究会、田中良

Survey of Materials for *Naniwa odori*（浪花踊）

—Satos' *Naniwa odori Banzuke*（番付）

from the Sixteenth Performance to the Twenty-third Performance—

Guest researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

KASAI Tsukasa

SATO Megumi

Abstract

The aim of this paper is to introduce *Banzuke*（番付）materials belonging to the Sato family that relate to *Naniwa odori*（浪花踊）. These materials are sourced from the sixteenth up to the twenty-third performance（the final performance before WW II）. We have attempted to summarize the features of *Naniwa odori*, by inserting a table at the end of this paper that includes descriptions of the poets, composers, choreographers, and set designers involved in each performance.

In this paper, we suggest that the transfiguration of *Naniwa odori* was significantly affected by *Hanayagibuyokenkyukai*（花柳舞踊研究会）. Evidence of this can be found in Ryo Tanaka's writings, which include names of those who participated in *Naniwa odori*, such as, Shiko Okamura（岡村柿紅）、Jusuke Hanayagi II（二代目花柳壽輔）、and Ryo Tanaka（田中良）. As we do not have sufficient evidence

relating to the music used in the performances, further investigations must be conducted into this aspect.

Keywords

Naniwa odori, Hanayagibuyokenkyukai, Ryo Tanaka

はじめに

本稿は、『人間社会環境研究』28号¹⁾、29号²⁾から継続して、佐藤家所蔵浪花踊番付を紹介する。簡易版番付の紹介は、本報告で終了する。第十六回浪花踊は、昭和5年に上演されており、浪花踊が日中戦争の影響で昭和12年に中断するまでの期間に相当する。

また、筆者・笠井は、「浪花踊に関する史料調査—佐藤家伝来の浪花踊番付（第一回～第六回）—」執筆時、新町浪花踊、芦辺踊第一回の上演時期について以下のように述べた。なお、ここに言う「同書」とは、『近代歌舞伎年表 大阪編』（第7巻43頁。大正11年4月3日初日、新町演舞場。典拠：「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」）である。

新町浪花踊の同書初見は、大正11年であるが、「第十二回浪花踊」と記述されているので、年一回の公演であれば、明治44年が初回であったと考えられる。(212頁)

「蘆辺踊」に関しては、同書初見は明治35年であるが、大正6年の項に、「第三十三回蘆辺踊」と記述されており、年一回の公演であったとすれば、明治18年に蘆辺踊が始まったと考えられる。(213頁)

しかし拙稿執筆後、新町浪花踊の初演は下記のとおり明治41年、蘆辺踊は、明治21年であったと思われるので、ここに訂正してお詫びしたい。

すなわち、「大阪日日新聞」に連載の「浪華紙魚百景 大商大商業史博だより “浪花踊 あやにしき”」³⁾（平成25年5月1日付、大阪商業大学商業史博物館専門職員・岡村良子氏執筆）によれば、既に昭和6年、大阪時事新報学芸記者であった中井浩水が『上方』第4号⁴⁾に「回頭春の踊」を

執筆し、新町浪花踊は明治41年を初回とし、「浪花踊あやにしき」として上演されたことを記している。

また岡村氏執筆の記事には、「第一回浪花踊あやにしき」木版刷りリーフレット（番付）の写真も掲載されている。

また、本稿執筆に際し、中井浩水「回頭春の踊」⁵⁾、上田長太郎「大阪廓の踊と演舞場の起源」⁶⁾より、大阪四花街、春の踊の初演時に関して以下のように確認した。先ほどの南地五花街初演（明治21年）に関する記述も、中井、上田両氏が記している。

南地五花街	明治21年11月 「浪花風流芦辺踊 御津の初汐」 (中井氏・上田氏) ⁷⁾
北の新地	明治15年6月 「浪花おどり」(上田氏) ⁸⁾ 大正4年5月 「大栄の曲」(中井氏) ⁹⁾
新町	明治41年4月 「あやにしき」(中井氏・上田氏)
堀江	大正3年3月 「太閤記」(中井氏・上田氏) ¹⁰⁾

なお、北の新地の初演をいつと考えるかは、現在のところこれ以上言及することが難しい。今後、詞章などを精査し、都踊の影響などを踏まえたうえで中井氏の指摘を参照しながら、史料の確認を継続したい。

1. 北の新地浪花踊の作品内容に関する纏め

本稿執筆に際し、北の新地の浪花踊に関して、その歌詞の執筆者を初め、作曲者、振り付け者、

舞台美術などその作品構成の主たる部分に関して一覧表を作成し、文末に掲載した。

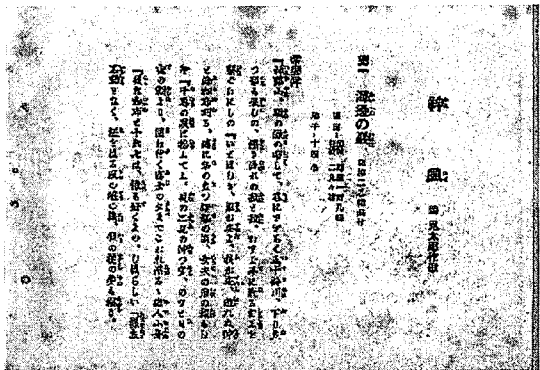
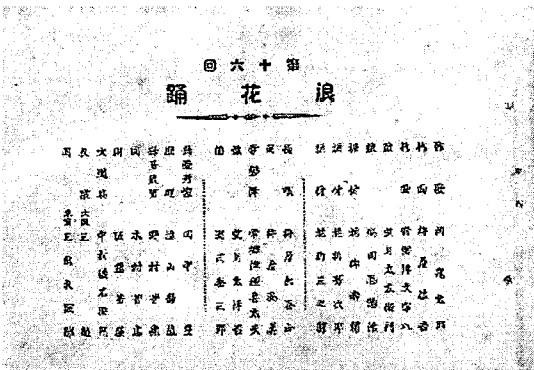
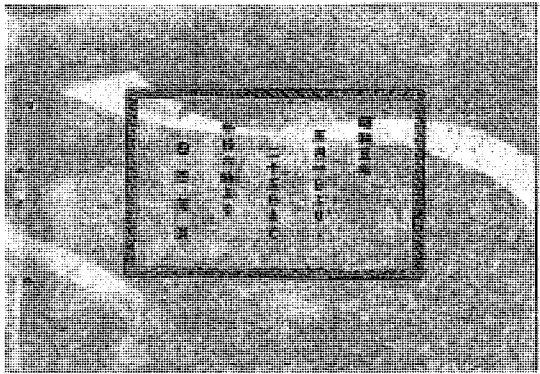
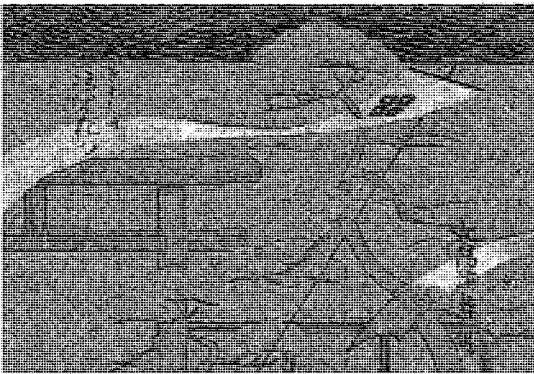
表から伺われる浪花踊の内容的な変容について、概略を纏めると、大きな節目は、振付が、西川石松から花柳壽輔へ変り、花柳舞踊研究会の影響が強くなって来る第十一回、大正14年ごろであろう。大正13年に花柳壽輔は上記の研究会を立ち上げ、新しい舞踊芸術を試み始めている。

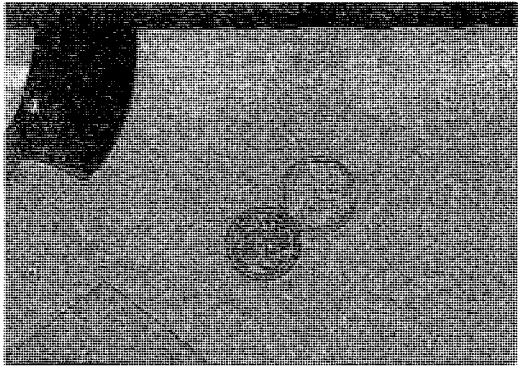
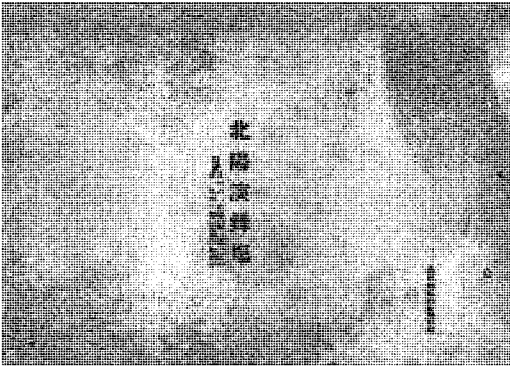
歌詞は、9回、10回目において、長らく作詞を担当していた半井桃水に岡村柿紅¹¹⁾を加えるが、二回のみで終わり、恐らく半井が亡くなる大正15年まで、再び半井一人で12回目まで作詞を担当している。半井が高齢に達したことも加味し、市村座の岡村に依頼したが、大正14年彼が亡くなっていることから、2回で終わったものと考えられる。

次いで、舞台美術の田中良も浪花踊に関わり始める¹²⁾。田中も著書で述べているが、大正12年、関東大震災のため、東京の劇場の多くが失われ、東京で活躍していた演劇人たちが関西にその活動の場を求める事態の影響もあった¹³⁾。恐らく、新しい芸術を求め活動の場を震災の影響下で模索した人々と、同じく浪花踊のためにその特徴を求め、芸の向上を求めた北の新天地関係者らの考えと状況が合致したものであろう¹⁴⁾。半井の没後は、作詞を岡鬼太郎や長田幹彦、木村富子らに依頼をしている。作曲者は、第十回から長唄が杵屋佐吉に変わっているが、北陽の特色であると述べられている江戸のものである常磐津や清元には変化が見られないようである¹⁵⁾。

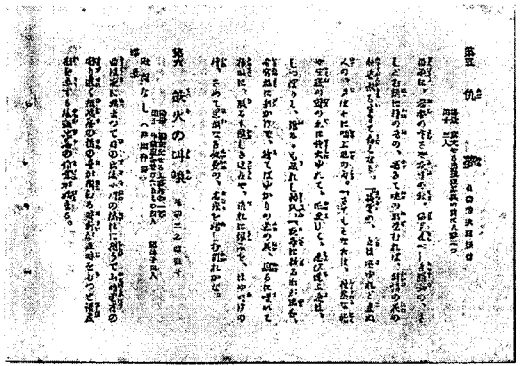
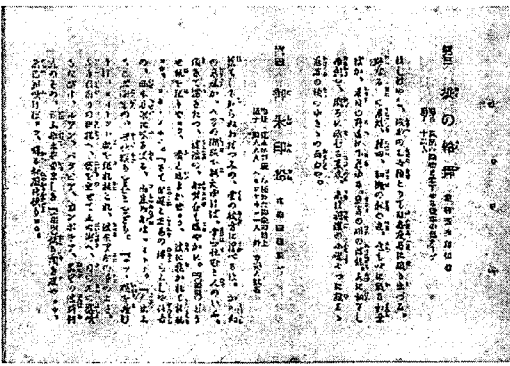
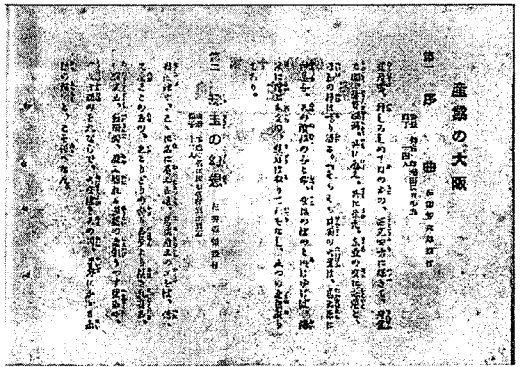
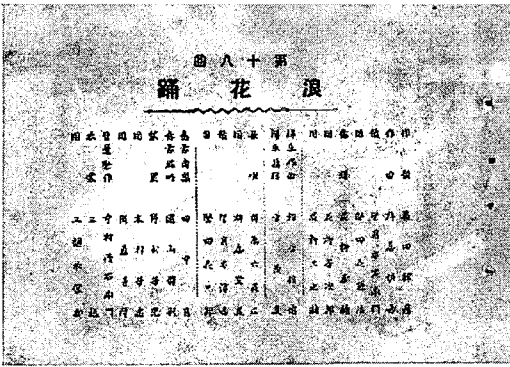
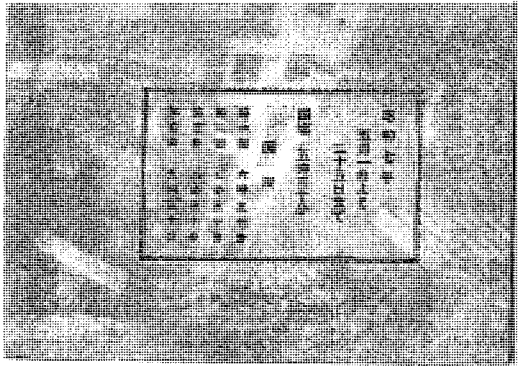
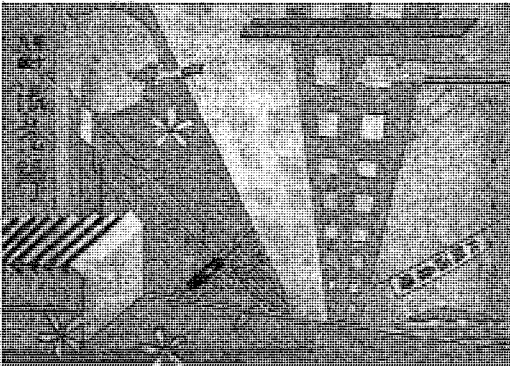
2. 簡易版番付紹介 (第十六回から第廿三回まで、完結)

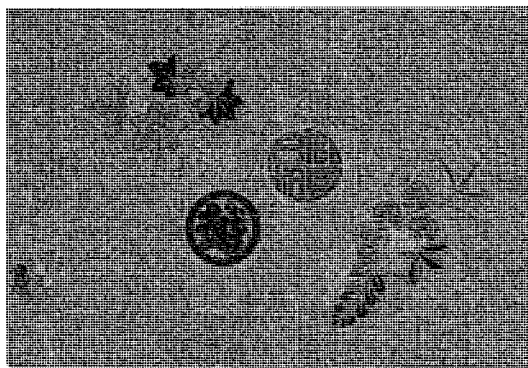
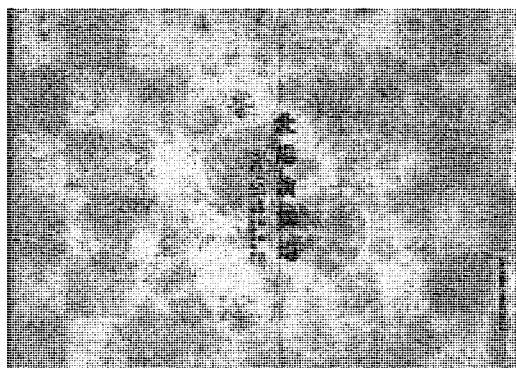
第十六回浪花踊



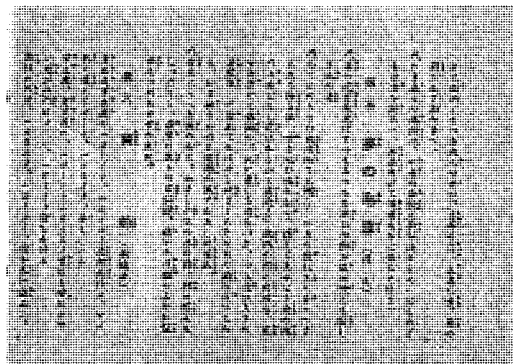
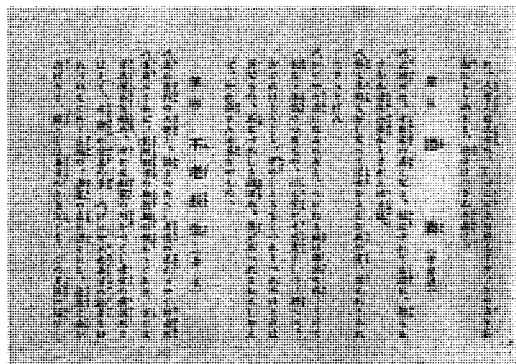
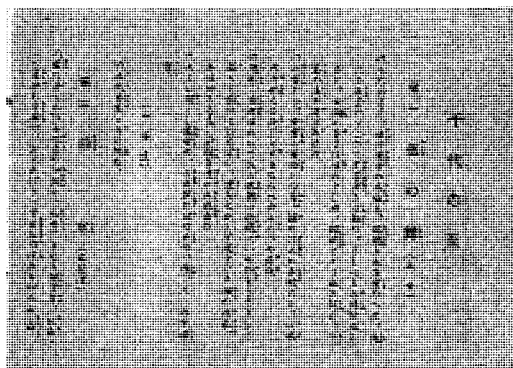
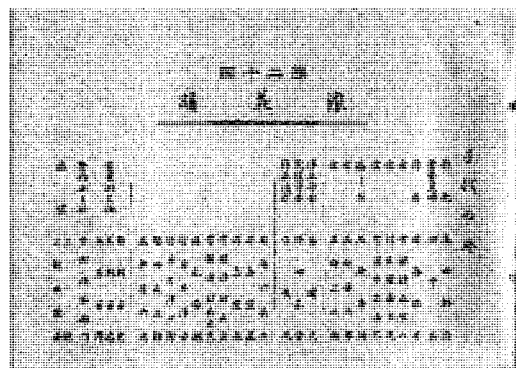
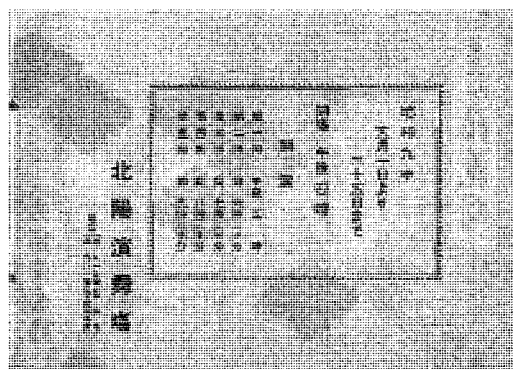
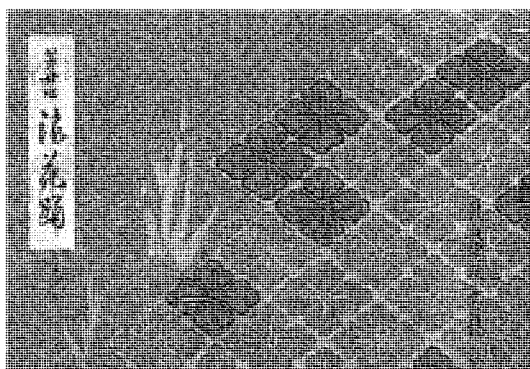


第十八回浪花踊





第廿回浪花踊



六、新編 七、新編

六、新編	七、新編
...	...

一、新編 二、新編

一、新編	二、新編
...	...

六、新編 七、新編

六、新編	七、新編
...	...

一、新編 二、新編

一、新編	二、新編
...	...

六、新編 七、新編

六、新編	七、新編
...	...

一、新編 二、新編

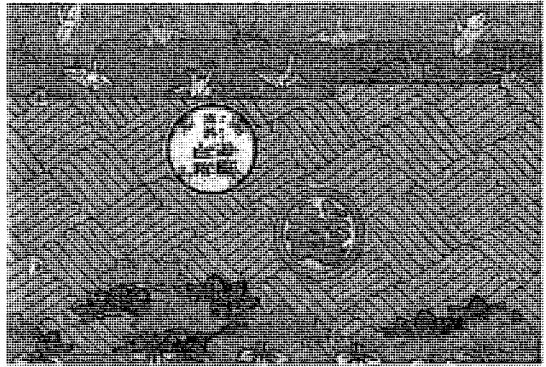
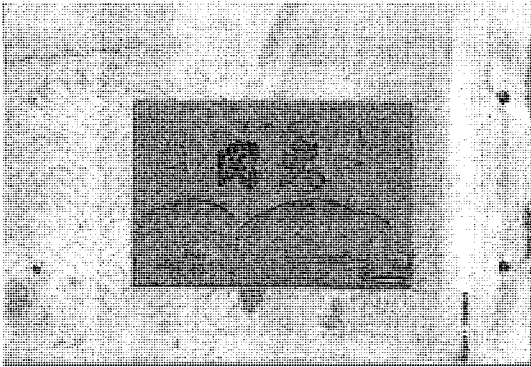
一、新編	二、新編
...	...

六、新編 七、新編

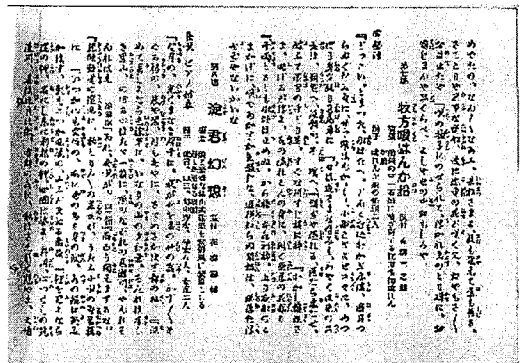
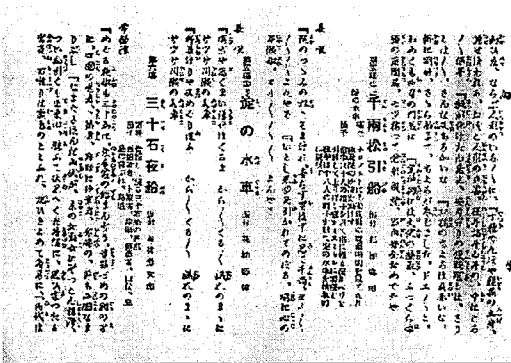
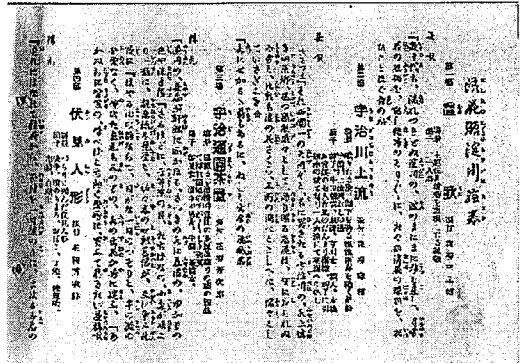
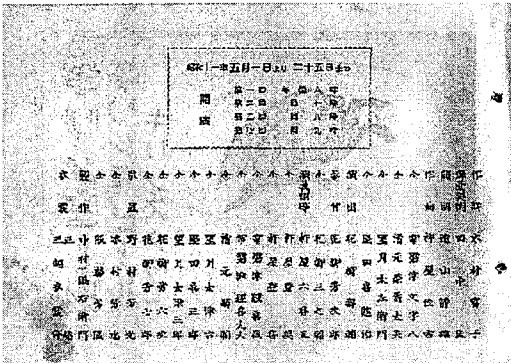
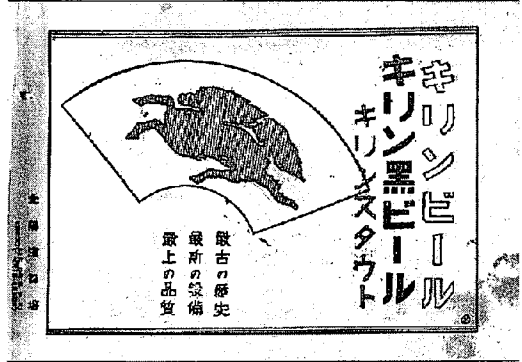
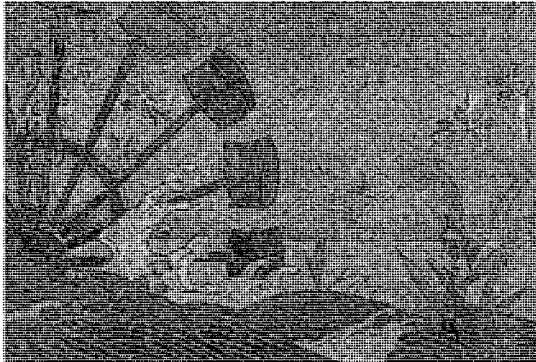
六、新編	七、新編
...	...

一、新編 二、新編

一、新編	二、新編
...	...



第廿二回浪花踊



【注】

- 1) 笠井津加佐, 佐藤恵「浪花踊に関する史料調査—佐藤家伝来の浪花踊番付（第一回～第六回）」『人間社会環境研究』28号, 平成26年, pp.211 - 231。
- 2) 笠井津加佐, 佐藤恵「浪花踊に関する史料調査—佐藤家伝来の浪花踊番付（第七回～第十五回）」『人間社会環境研究』29号, 平成26年, pp.101-122。
- 3) 筆者・笠井は, 本学准教授, 安部聡一郎氏よりこの記事をご教示頂いた。記事の所在は以下の通りである。<http://www.nnn.co.jp/dainichi/remsai/naniwashinmi/130501/20130501037.html>
- 4) 南木芳太郎編集発行『上方』第4号, 創元社, 昭和6年。
- 5) 中井浩水「回頭春の踊」『上方』第4号, 創元社, 昭和6年, pp.74-79。
- 6) 上田長太郎「大阪廓の踊と演舞場の起源」『上方』第4号, 創元社, 昭和6年, pp.80-84。
- 7) 中井「所謂大阪の春の踊の本家は矢張年の功の芦辺踊でしょうな」前掲書, p.76。
- 8) 上田「大阪の遊廓の踊で一番古いのは北新地の浪花踊で, 明治十五年六月に開催されている」前掲書, p.80。
- 9) 中井「再生した北陽浪花踊は大正四年五月白念坊如重翁作歌「大栄の曲」が第一回」前掲書, p.76。
- 10) 中井「堀江のこの花踊が大正三年の三月に名乗りをあげ」前掲書, p.78。上田「堀江演舞場が出来たのは大正三年であるが廓としては, それまでに付近の明楽座や堀江座を使って, 春の踊, 秋の温習会などをやっていた（中略）竣工したのが前記の大正三年で, 同年三月藤村毅運氏作「太閤記」で蓋をあげ」前掲書, p.83。
- 引用部分下線部に関しては, まだ, 検討中である。「春の踊」が温習会的なものであったのか, 所謂, 後日四花街の春恒例の公演となった花街の踊であったのか, この記事のみでは同定出来ない。今後も調査を継続する。
- 11) 「毎々述べた様に東京に於て展開した新劇, 新舞踊運動は此頃に至って, 益々隆盛を極め, 藤蔭会や花柳舞踊研究会の創作発表も可成り其意義と価値とを認められて, 可否を論じられる声も大きくなっていった時なので, 北陽は其振付を花柳壽輔氏に依頼した」田中良『舞台美術』西川書店, 昭和19年, p.102。
- 12) 「私が北新地の浪花踊の舞台を装う様になったのは, 関東大震災の頃市村座の舞台事務を預かっていた為同年秋宝塚に於て菊五郎一座の公演をすることになり, 関西へ出張した頃から岡村柿紅氏を通じて北新地の役員諸氏と知り合いになり, 此の縁によって岡村氏作詞のもの舞台を描くことになったわけである」田中良前掲書, p.102。
- 13) 「都踊に対し此の地では蘆辺踊とか木の花踊, 又は浪花踊と唱えたが, 都踊の場合と異なり相互の競争が烈しいのと, 新味を要求する大阪人気質は単なる都踊の模倣では満足せず毎年相等の積極的表現に努力したもので各自の特色を持つに至った」田中良前掲書, pp.101-102。
- 14) 「市村座の関係の上に, 花柳舞踊研究会との関係も加わって吾々は又々此娯楽物たる浪花踊に対しても何等かの文化的向上への意義を付加すべきだと云う希望を持って善処したくなり, 次第に質的水準を高める為めの道楽気を盛り込む様になって, 研究会に於いて実験済みの新舞踊形式迄盛り込んで, 群舞も平面的連続模様式の簡単なものから, 立体的にして複雑性を持つ近代的群舞をも振り付けられ, 伴奏も唯だ三味線楽のみにとどまらず, 洋式管絃楽をも用いると云う積極ぶりで其多角的企画は停頓勝ちな総踊りを別踊りとして挿入し, 全体の変化を与えた。然し時にはレビューの長所と思われる手法をも盛り込んで相当創作的の効果を実験出来た」田中良前掲書, p.102。
- 15) 「地方に長唄と常磐津とを併用したのは茲が始まり, 時には清元を使つたこともある」中井前掲文, p.77。

表1 浪花踊作者及び作曲者、振付師などの変遷

	作詞	作曲 (長唄)	作曲 (常磐津)	作曲 (鳴り物)	作曲 (その他)	美術 (含背景)	道具	振付	衣装
第一回	白念坊如 電翁	杵屋勘五郎	常磐津林中	望月太左衛門 (鼓)		[野村芳光]	[中村儀右衛門 (大道具)]	西川石松	
			常磐津文字兵衛	望月長佐久 (同)		[木村芳忠]		西川花	
						[田中芳隆]			
第二回	霞亭散人	猿若三左衛門	常磐津林中	望月太左衛門 (鼓)		[野村芳光]	[中村儀右衛門 (大道具)]	西川石松	三越呉服店
						[木村芳忠]		西川花	
						[田中芳隆]			
第三回	半井桃水	猿若山左衛門	常磐津林中	望月太左衛門 (鼓)				西川石松	三越呉服店
								西川花子	
第四回	半井桃水	猿若山左衛門	常磐津林中	望月太左衛門		野村芳光 (背景)	中村儀右衛門 (右道具)	西川石松	三越呉服店
			常磐津文字八	望月長左久		木村芳忠 (同)		西川花子	
						田中芳隆 (同)			
第五回	半井桃水	猿若山左衛門	常磐津林中	望月太左衛門 (鼓)		野村芳光 (背景)	中村儀右衛門 (大道具)	西川石松	三越呉服店
			杵屋喜太六	常磐津文字八	望月長左久		木村芳忠 (同)		西川花子
							田中芳隆 (同)		
第六回	半井桃水	杵屋勝太郎	常磐津文字太夫	望月太左衛門		野村芳光 (背景)	中村儀右衛門 (大道具)	西川石松	三越呉服店
			常磐津文字八	望月長佐久		木村芳忠 (同)		西川花子	
							田中芳隆 (同)		
第七回	半井桃水	杵屋寒玉	常磐津松寿斎	望月朴清 (鼓)		野村芳光 (背景画工)	中村儀右衛門 (大道具)	西川石松	三越呉服店
		杵屋六左衛門	常磐津文字八	望月太左衛門 (同)		木村芳忠 (同)		西川花子	
		杵屋喜多六				阪藤芳隆 (同)			
第八回	半井桃水	杵屋寒玉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)		野村芳光 (背景画師)	中村儀右衛門 (大道具)	西川石松	三越呉服店
		杵屋六左衛門		望月太左衛門 (同)		木村芳忠 (同)		西川花子	
		杵屋喜多六				阪藤芳隆 (同)			
第九回	半井桃水	杵屋寒玉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)	弘田龍太郎 (洋楽作曲)	田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	西川石松	三越呉服店
		岡村柿紅	杵屋六左衛門	望月太左衛門 (同)		久保田米斎 (考証)		西川花子	
						野村芳光(舞 台装置)			
						木村芳忠 (同)			
					阪藤芳隆 (同)				

第十回	岡村柿紅	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)		野村芳光 (舞台装置)	中村儀右衛門 (大道具)	西川石松	三越呉服店
	半井桃水			望月太左衛門 (同)		木村芳忠 (同)		西川花子	
第十一回	半井桃水	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)		野村芳光 (舞台装置)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳幾太郎	三越呉服店
				望月太左衛門 (同)		木村芳忠 (同)		花柳徳寿郎	
								西川石松 (顧問)	
								花柳壽輔 (同)	
第十二回	半井桃水	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)		田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳芳次郎	大阪三越呉服店
				堅田喜惣治 (同)		遠山静雄 (照明)		花柳三之輔	東京三越衣裳部
						野村芳光 (舞台装置)		花柳壽輔	
						木村芳忠 (同)			
第十三回	岡鬼太郎	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)		田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳芳次郎	大阪三越呉服店
				堅田喜惣治 (同)		遠山静雄 (照明)		花柳三之輔	東京三越衣裳部
						野村芳光 (舞台装置)		花柳壽輔	
						木村芳忠 (同)			
第十四回	岡鬼太郎	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月朴清 (鼓)		田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳壽輔	大阪三越呉服店
				堅田喜惣治 (同)		遠山静雄 (照明)		花柳芳次郎	東京三越衣裳部
						野村芳光 (舞台装置)		花柳三之輔	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			
第十五回	岡鬼太郎	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門 (鼓)		田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳壽輔	大阪三越呉服店
	半井桃水			堅田喜惣治 (同)		遠山静雄 (照明)		花柳芳次郎	東京三越衣裳部
	大槻如電					野村芳光 (舞台装置)		花柳三之輔	
	岡村柿紅					木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			
第十六回	岡鬼太郎	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門 (鼓)		田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳壽輔	大阪三越
				堅田喜惣治 (同)		遠山静雄 (照明)		花柳芳次郎	東京三越衣裳部
						野村芳光 (舞台装置)		花柳三之輔	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			

第十七回	長田幹彦	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門 (鼓)	松平信博 (行進曲作曲)	田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (大道具)	花柳壽輔	大阪三越
				堅田喜惣治 (同)	平茂夫 (洋楽編曲)	野村芳光 (舞台装置)		花柳芳次郎	東京三越 衣装部
						木村芳忠 (同)		花柳三之輔	
						阪藤芳隆 (同)			
第十八回	長田幹彦	杵屋佐吉		望月太左衛門 (鼓)	松平信博 (洋楽作曲)	田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (背景製作)	花柳壽輔	三越
				堅田喜惣治 (同)	平茂夫 (洋楽指揮)	遠山静雄 (舞台照明)		花柳芳次郎	三越衣装部
						野村芳光 (装置)		花柳三之輔	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			
第十九回	長田幹彦	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門	清元栄寿太夫 (作曲)	田中良 (舞台考案)	中村儀右衛門 (背景製作)	花柳壽輔	三越
				堅田喜惣治	島国夫 (洋楽作曲)	遠山静雄 (同)		花柳芳次郎	三越衣装部
					平茂夫 (洋楽指揮)	野村芳光 (装置)		花柳三之輔	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			
第二十回	長田幹彦	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門	清元栄寿太夫 (作曲)	田中良 (舞台美術)	中村儀右衛門 (製作部主任)	花柳壽輔	三越
					島国夫 (洋楽作曲)	野村芳光 (背景部主任)		花柳芳次郎	三越衣装部
					町田佳章 (民謡作曲)	木村芳忠		花柳三之輔	
					平茂夫 (洋楽指揮)	阪藤芳隆			
第二十一回	木村富子	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門	橘薫 (洋楽作曲)	田中良 (舞台美術)	中村儀右衛門 (製作)	花柳壽輔 (演出)	三越
				堅田喜惣治	平茂夫 (洋楽指揮)	遠山静雄 (照明)		花柳芳次郎 (振付)	三越衣装部
						野村芳光 (装置)		花柳三之輔 (同)	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			
第二十二回	木村富子	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門	清元栄寿太夫 (作曲)	田中良 (舞台美術)	中村儀右衛門 (製作)	花柳壽輔 (演出)	三越
				堅田喜惣治		遠山静雄 (照明)		花柳芳次郎 (振付)	三越衣装部
						野村芳光 (装置)		花柳三之輔 (同)	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			

第二十三回	木村富子	杵屋佐吉	常磐津文字八	望月太左衛門	清元栄寿太夫 (作曲)	田中良 (舞台美術)	中村儀右衛門 (製作)	花柳壽輔 (演出)	三越
				堅田喜惣治	菊原琴治 (作曲)	遠山静雄 (照明)		花柳芳次郎 (振付)	三越衣装部
					島国夫 (作曲)	野村芳光 (装置)		花柳三之輔 (同)	
						木村芳忠 (同)			
						阪藤芳隆 (同)			

注) 表1は、簡易番付の記載をもとに作成したが、愛蔵版にのみ記載が確認できた場合は [] 内に記載した。